

第23回 ああ、ソーリ！

IT生

「ソーリ（総理）！ソーリ！」と国会で叫び、名をはせた女性議員もいたが、先日、思いもかけず「ソーリ」という言葉をきくはめになった。さる会合で、元総理の細川護熙氏にお会いした。総理を辞されたのはずいぶん前のことのように思えるのだが、細川氏に声をかける人々は「ソーリ」といって握手を求める。細川さんも笑顔を応えていた、なんだか、独特の世界である。私は、政治家に「先生」というのもはばれる性格なので「細川さん」とお呼び止めした。



「質実国家」への回帰をと主張する元首相の細川護熙氏

というのは、文藝春秋6月で「人口減少はこわくない 江戸時代の日本にもどれ」という記事を書かれていたからだ。成長一辺倒の価値観をあらため、生活の質に重点を置き、文化の香り豊かで、自然や環境にも配慮した「品格と教養ある国」を目指すべきだという主張だった。確かに、江戸時代の日本は、細川氏の指摘どおりの側面をもっていた。

なぜならば、武士が国家運営の中心を担っており、他の階級の国民がそれを支える仕組みであったからだともいえる。いいかえれば、常に社会の安定を旨とする「軍事国家」であった。江戸城・御所には、避難するための「地震の間」があり、屋敷の雨戸には地震で開かなくなった時のために「からくり戸」が設けられていた。地震の際は、数時間以内に各大名が江戸城に参集。大名屋敷の被害確認も1日以内に情報収集され、出入りの商人や職人が復旧にたずさわり、また、国もとから各大名の江戸屋敷へ救援部隊がはせ参じた。

庶民の不安を払拭する対応も迅速で、町人へのお触れも、町奉行を通じて地震直後から出された。当日夜には火の用心と便乗値上げ禁止、翌日は風紀取り締まり強化、3日目は遺体処理、お救い小屋（仮設住宅）の設置。9日目からは炊き出しが開始され、握り飯を1週間で延べ20万人に配布した。1カ月後には約40万人の町民を対象として性別体格別に量を決め、米を支給した。

仮設住宅も、ふだんから建材がストックされており、数日以内に完成させ、避難民を収容した。

こうした迅速でスムーズな人やモノの流れは、日本社会において「守るべきもの」がはっきりしていたことの証左であろう。「守るべきもの」が何であるか、江戸時代と現代と何が違うのかという議論はあろうが、「守るべき何か」が国民の中にあるのか、ないのかについては、やはり江戸時代にまなぶべきことはあるのだろう。

果たして、「細川さん」に、「防災のいきつくところは、細川さんの御主張どおりです」とお伝えしたところ、ただひとこと、「そうだと思います」とうなずかれた。さすがは、お殿様である。

(平成29年6月)